

四神の一、朱鳥について

林 巳 奈 夫

『史記』天官書は中国で星に関する知識をまとめて記した現存の最も古い公的記録である。ここでは恒星は中央と東南西北の五つのグループに分けて記述され、各方向のグループは中宮、南宮等と宮の語をつけて呼ばれる。そして中央を除いて各宮には動物の名の入った星座群の呼称と中心的な星座名とが挙げられ、各動物名には五行の夫々の方向に対応する色の名を冠し、東宮は蒼龍(青い龍)、南宮は朱鳥(赤い鳥)、西宮は白虎(白い虎)、北方は玄武(黒い武装した動物「カメ」)の名の星座が記される。これがよく知られる天の四方の神、四神である。それらの動物は東南西北の各宮の中の、太陽の運行するコース上ないしその近くから選ばれた二八の星座(二十八宿)中の目立った星座の形を夫々の動物の形に見立てたもので、『史記』のテキスト中に西方の星座群中のオリオンについては、三つの星の外にある四つの星は白虎の左右の肩と腰だ、というように解説のつけられるものもあり、

説明はなくてもその星座の中の星と重ねてえがかれた図像からその名の由来の察せられるものもある。蒼龍の名が東方の星座群中のサソリ座から来ているときである。^②漢時代以後、四神の図像は鏡背紋とか地下の墓室の内壁の裝飾等に大量に見ることができ、そこに表現されている図像は星座の星の並び方とは関係のない青い龍、白い虎等の形をとった神像で、それらが星座に由来する神であることを忘れさせる体のものである。

『史記』天官書には南方の星座群について「南宮は朱鳥」とあり、朱鳥は四神の一つに教えられる時に朱雀と呼ばれ、この「雀」は鳳凰の意味とされ、漢以後の画像では同時代に鳳凰と解されていた形をもってえがかれている。朱鳥はすく次に記すように、『史記』天官書でどの星座が朱鳥のどの身体部分に当るかにつき、四神の中で一番丁寧な説明のあるものである。今まで筆者は朱鳥につき、獅子座の南に位置する長大な星座群だから(図1)、四神鏡



図2 朱雀 方格規矩
四神鏡 漢

によくある図2のような細長い朱雀像がそれに対応するのだろう、位に思い、よく考えてみたことがなかった。最近少し調べてみた所、何かと気づいた所がある。以下にそれを記しておきたい。

『史記』天官書の関係部分と、それに対する唐の司馬貞の『史記索隱』、唐の張守節の『史記正義』の注釈は次のごとくである（この論文の論旨と直接関係のない所は引用を省く）。

南宮朱鳥、軒、衡（南宮は朱鳥と軒、衡である）

『正義』、柳為朱鳥味、天之厨宰、主尚食、和滋味（柳の星座は朱鳥の味（嘴）で、天のコック長である。宮中の御馳走を司る官を管轄し、味を調える）^③。

（中略）

柳為鳥注、主木草（柳は鳥の注（嘴）と呼ばれ、木や草をつかさどる）。

『索隱』。案『漢書』天文志「注」作喙。

『尔雅』云「鳥喙謂之柳」。孫炎云「喙、朱

鳥之口、柳其星聚也」、以「注」為柳星、故

主草木（案するに『漢書』天文志には「注」

の字を「喙」と書いている。『尔雅』に「注」

「（朱）鳥の喙を「柳」という、と。孫炎

（魏の人）の注にいう「喙は朱鳥の口で、柳はその星の聚合である」と。「注」を柳星と呼ぶので草や木を司る）『正義』喙丁救反、一作「注」。柳八星、星七星、張六星為鴉火。於辰在午。……柳為朱鳥味。天之厨宰、主尚食；和滋味（この一三字「南宮朱鳥」の条の『正義』と重複、訳には省く）（喙の音は丁救の反し（チュウ）、一に「注」と書く。柳の星座の八星、星の星座の七星、張の星座の六星を鴉火という。十支の方角でいうと午に当る）。

七星、頭、為員官、主急事（七星は（朱鳥の）頭で、員官と呼ばれ、急ぎの事を司る）。

『索隱』。七星、頭、為員官、主急事。案、宋均云「頭、朱鳥頸也、員官、喉也、物在喉嚨、終不久留、故主急事也（七星、頭、為員官、主急事」とあるのは、案するに宋均（魏の人）はいう「頭とあるのは朱鳥の頭である。員官とは喉である。物が喉にある時、長い間は留らない。故に急ぎの事を司るのである」と。

張、素、為厨、主餽客（張は素で厨と呼ばれ、賓客に酒をすすめることを司る）。

『索隱』。素、嗟也、『尔雅』云、「鳥張嗟」、郭璞云「嗟、鳥受食之処也（素は嗟である。『尔雅』に云う「鳥の張は嗟なり」

と。郭璞(晋の人)は(注に)云う「嗛は鳥の食った物を受ける場所である」と。

『正義』張六星、六為嗛、主天府食飲賞賓客(張の六星は(全体)六個を嗛という。天の厨房の食物と飲物を司り、賓客に対し褒美に賜る酒をすめることを司る)。

翼為羽翮、主遠客(翼は細かい羽根と太い羽根であり、遠来の賓客を司る)。

『正義』翼二十星、軫四星、長沙一星、轄二星、合軫七星皆為鶉尾、於辰在巳……翼二十星為天梁府、又主夷狄、亦主遠客(翼の二十星と(その東の)軫四星、長沙一星、轄二星を合せた軫の七星は鶉尾という。十二支の方角でいうと巳に当る。翼の二十星は天の詩歌、音楽を採集保存する役所で、また中国の周辺の野蕃人を司り、また遠来の賓客を司る)。

と。ここに引用した中で、張の条の『索隱』に『尔雅』が引かれるが、郝懿行の『尔雅義疏』の現行のテキスト(釈鳥)には
亢、鳥嗛、其根嗛(亢は鳥の嗛(のど)、其の(鳥の)根は嗛なり)

とあり、郭璞の注に嗛について

嗛者受食之処、別名嗛。今江東呼根(嗛とは食物を受くるの

処、別に嗛と名づく。いま江東に根と呼ぶ)。

とある。嗛は鳥の胃の手前にある器官で、どんどん呑み込んだ飼を一時貯めておく所。俗にいう「えぶくろ」で、正式には現在も嗛の字を使って嗛嚢と呼ばれる。『史記』の星名の張は『尔雅』に出てくる根に当る名称と思われる。ここが厨で客を賜することを司るといふのは理に叶っている。

さて、前引の柳の条および翼の条の『正義』に夫々鶉火、鶉尾が出てくる。これは二十八宿とは別の天の区分、十二次に属する呼称である。木星は略々二年かかって全天を一周する。そこで天を十二支で表示された方角に対応するように十二等分し、木星がどこにあるかによってその年が十二支で示されるどの年に当るかを知らることができる^④。十二に分けられた各方角には星紀、玄枵等々と特有の名称が附されている(図3)。この図に見るように二十八宿は長短が不揃いであるため、十二次とは不規則なずれがある。前引の『正義』は二十八宿の名で示された星座が十二次のどこに該当するかを解説したものである。

十二次は『春秋左氏伝』に出て来、専ら木星の位置を示すのに用いられていて、この書物の成立した時期、前四世紀には存在していたことが推定される^⑤。二十八宿の方は十二次に比べて自然発生的な性格を持つので、それより古く始まっていたと考えられて

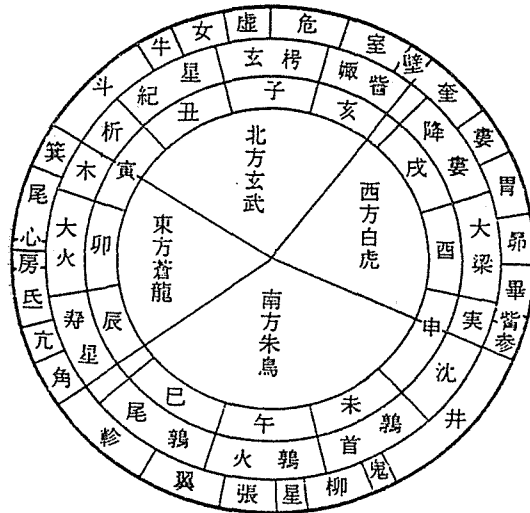


図3 二十八宿と十二次 橋本1993より

いる。前五世紀後半の曾侯乙墓出土の衣裳箱の蓋にその古い例が知られている。二十八宿と十二次の両システムが全体として起原的に如何なる関係にあるかは、筆者の現今の関心外である。しかし橋本氏の「十二次の南方に位置する鶉首、鶉火、鶉尾の三次が二十八宿の南方朱鳥という鳥類の形象と一致することは注目すべきである」との指摘は興味深い。

『尔雅』釈天に

味謂之柳、柳鶉火也（味はこれを柳といい、柳は鶉火である）とあり、後の四字について郭璞は注に

鶉鳥名、火属南方（鶉は鳥の名、火は南方に属す）

という。味は前引『史記』天官書の「柳は鳥の注たり」の「注」に当り、二十八宿中の星座であるが、『尔雅』はその呼称である柳を、十二次に含まれる鶉火をもって解しているのである。そして鶉火の名称について郭璞は鶉は鳥（この星座の鳥、朱鳥）の名で五行で火は南方に属するからこの星座名に「火」を加えて鶉火と呼んだ、と解していると思われる。そうであれば青龍、朱鳥のように、五行の属性を動物名の上に冠して火鶉とでもすべきであろう。また十二次の鶉火は図3に見るように柳、星、張、翼にまたがっていて、柳は十二次の鶉火だということにはならない。

『周礼』考工記、斲人に

鳥旗七旂、以象鶉火（鳥をえがいた旗「旗の種類の名」は七本の吹流しがあり、もって鶉火を象徴している）

とあり、鄭玄は注に

……鶉火朱鳥宿之柳、其属有星、星七星（鶉火は朱鳥の宿の柳である。それに属するものに星「宿」があり、星宿には七つの星がある「七本の旂はこの七つの星を象る」）

と説明する。鄭玄は柳が鶉火で、この柳に附いている「星」の星

が云々、と言うのであるから、二十八宿中の柳が鶉火だと考えているのである。すなわち『尔雅』と同じ考え方である。郝懿行は『義疏』に柳は鶉火の最初にあるから、それで代表させたのだ、と説明するが如何であろう。

柳が鶉火だという考え方は『左伝』にも窺われる。『左伝』襄公九年の条に、宋の国であった火災に關連して晋侯が部下にした質問に對する答えとして、次のくだりがある。

古之火正、或食於心、或食於味、以出入火、是故味為鶉火、心為大火（昔の〔伝説的な〕火を司る官は、〔神として扱われ〕心宿の祭祀の際にそのお相伴にあずかり、或いは味宿の祭祀の際にそのお相伴にあずかり、火の出納を行った。そこで味は鶉火といわれ、心は大火といわれる）^⑨

とあり、杜預（晋の人）の注に

謂火正之官配食於火星。建辰之月、鶉火昏在南方、則令民放火。建戌之月、大火星伏在日下、夜不得見、則令民内火、禁放火（昔の）火を司る官（の神にまつり上げられたもの）が火の星の祭祀の相伴で御馳走をしてもらうことを謂ったものである。冬至を含む月から五ヶ月目の月、鶉火が日没後に真南に來る時期に、民をして「陶器や鋳物に」火の使用を認め、^⑩それから六ヶ月後、大火が太陽と重なって夜間に見えなくな

ると、その火の使用をさし止める）。

とある。ここでは鶉火、大火といった十二次の次の名称が味（柳）、心といった二十八宿の一つを指すのに使われている。前引の『尔雅』や『周礼』の鄭玄の注のような言い方のあったことが、ここからも知られる。

以上により鶉火、大火は火を司る火正の神と關係の深い、それらよりも上位の神で、柳と心の星座に關係づけられたものであったことが知られた。鶉火、大火の名はそれ故、鶉の火、大いなる火と解すべきであろう。

右に見た所により、二十八宿の柳、星、張、翼とつづく星座が一羽の鳥の嘴、喉、えぶくろ、翼に見たてられ、朱鳥を形成して、嘴に當る柳は鶉の火の星とも呼ばれていたことが知られた。この朱鳥も含み、鳥の頭および尾の延長をも并せた十二次の三つの次が鶉の頭、鶉の火、鶉の尾と名づけられている所をみると、十二次のこれらの名称は二十八宿より後起のもので、鶉の火の星名を核にして作られたのではないかと考えられてくる。二十八宿と十二次の成立ちが全体としてどういう關係にあるかは、専門の方にお考えいただくとして、筆者にとって差当り重要なことは、朱い鳥の星座群の中の、鳥の嘴に當る星座が鶉という鳥名で呼ばれていることである。

鵝セウという是誰でもまずウズラと思う。筆者も最近までそう思い、ウズラの嘴は太短く、曲りも少いのに柳の星座のどこがこれに似ているのか不可解だと考えていた。朱鳥は柳を西の端にして東へ

星、張、翼とつづき、翼は北向に拡がっているから、嘴は西向か南向のはずである。しかるにそこは西から南へと鉤形をなし、ウズラの嘴とは全く似ないからである。しかしこの星座の名の鵝はウズラではなく、ワシの意味に読まなければいけないのであった。

許慎（後漢の人）の『説文解字』に鵝セウの字があり、
 鵝、雕也……詩曰、匪鵝匪鴞（鵝は雕〔ワシ〕なり……『詩』

（谷風之仵、四月）に曰わく、「鵝にあらざ鴞にあらざ」とある。現行の『詩』をみると「匪鵝匪鴞」とあり、『説文』の鵝は鵝セウと書かれる。毛伝に

鵝鵝也、鵝、燕貪殘之鳥也（鵝は鵝〔ワシ〕なり。鵝と鵝とは貪殘〔貪欲で凶悪〕な鳥なり）

とある。段玉裁は『説文解字注』に『説文』の鵝が現行の『詩』で鵝と書かれているのは、字を簡略化したものだ、と記す。そして『説文』には別に佳に従った鴞の字があつて「雉の属なり」と釈され、こちらがウズラの字である。經典中で鴞首、鴞火、鴞尾と書かれる鴞の字は本当は鵝と書くべきであり、『詩』、魏風（伐檀）に出てくる縣鵝（吊した鵝〔狩獵の獲物〕）、『礼記』内側に出

てくる鴞羹（鴞のスープ）の鴞は鴞（ウズラ）で、コンテキストによつて読みわけなければいけない、と言う。柳の星座の鉤形の部分はワシの嘴と見て始めて解釈がつく。

朱鳥の星座群中の柳の星座の鳥の嘴はワシの類の嘴に見たてられたものであることが知られたのであるが、それにしても曲りが強すぎる。猛禽の嘴ならば図1の柳の星座の星にふられた番号の五、一、二までで十分であり、三、四は余計である。これもかねてから説明が難かしいと困惑していたことであるが、殷々西周の鳳凰の類の嘴で、図4のようなものから、図9等のようなひと巻きたような形のもののあることである。その類の図像は自然界に棲息する鳥類の写生ではなく、それを原形にした想像上の神の図像であることはいままでもないが、その嘴もただの猛禽の嘴の写生ではなく、その神化された天上の鴞（ワシ）の火の星座の嘴を象つたものと見れば解釈がつくと考える。

殷周の青銅器その他に表現されている多様な図像で、その由来の説明の難かしいものは無数にあり、思いついても、これで間違いない、というのは滅多にないものであるが、これはかなり自信の持てる解釈である。

鴞セウ＝雕＝ワシというと直ちに思い浮べられるのは、現今も中国の山地に広く分布し、昔の中国人にもよく知られていたはずのイ



図4 鳳凰 禁 西周前期

ヌワソんであろう。日本の山岳地帯にもいるが、未だ見たことはない。全体に黒褐色であるが、頭の上から後頭にわたる部分の羽毛は長く、柳葉状をなし、黄赤色^⑬で、それによって現代の中国名で金雕と呼ばれる^⑭。この金色の羽毛は図鑑では伏せた状態にえがかれているが、岩上にとまった写真で横から風を受け、伸びた髪のようにボサボサと立つ様の写ったものがある^⑮。図4で頭の後に長い冠羽のようなものが垂れているのは、このような金色の羽根の図式化された表現と解される^⑯。この星座は前記のように鶉火すなわち鶉の火とも呼ばれ、サンリ座のアンターレスの大火（大いなる火）と並んで火の神とされ、陶器製作や銅器鑄造業の火の使用開始の目印とされるが、アンターレスとは異なり、柳の星座の中には目立った赤い星もない。その星座が春の陽の気の盛んになる月に、日暮時に真南に来るといふことと共に、それが燃え熾

る火炎のような色の冠羽を持ったイヌワソンの頭の星座であったことが強く係っている、と考えれば、これはもつともなことで理解されよう。

図4の冠羽は特別長く表現されているが、もう少し短いのが普通である。そのようなS字形に翻る羽冠を持った猛禽の表現は、中国では殷周より四千年も古く、河姆渡文化に遡る。先に筆者が太陽の幻日に起原を持つと考えた、日月を負う双鳥にこれが見出されるのである（図5）。先に幻日が鳥頭に見立てられたと考えた時、その鳥がなぜ嘴が真直な鳥でなく、猛禽の曲った嘴を持ち、S字形の冠羽を持った鳥であるのか説明しなかった。その時はわからなかったからである。今にして思えば、イヌワソンがその時分に既に火の鳥と見られており、太陽の両側に現れるからには、その鳥はイヌワソンの姿でなければならぬ、と考えられたに相違ないのである。

河姆渡文化の太陽とその両側の幻日を日の円盤と外向の双鳥で表現した図像の伝統が、二千年ほど後の良渚文化の神面とその両側の鳥形図像にたどられ、それが更に千数百年後の殷文化の青銅器上の饗饗——当時の最高神・帝——にも残り、その両側に外向の龍身鳥首神が配される形で、ないしは饗饗の身体の外端が鳥頭に化するという形（図6）^⑳で認められることは、以前に詳論した

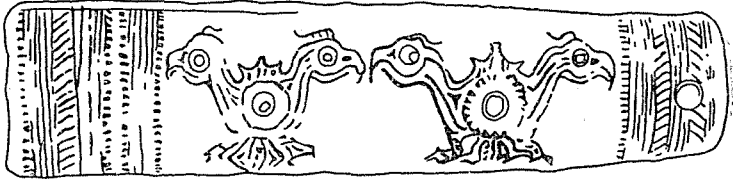


図5 双鳥の負う日と月 骨匙 河姆渡文化

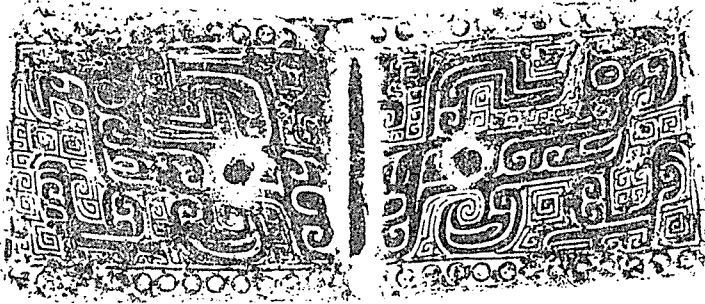


図6 身体の端が鳥頭に化した饗餐 爵 殷後期

所である。河姆渡文化の日月神の両側の双鳥の頭が、殷文化のイヌワシを象った図像と共通の特徴を持っているのは、決して偶然のことではありえない。

さてこのイヌワシの星座を象った鳥形の図像は、図7の戈にも見出される。戈に例の多い装飾であるが、大きな巻き込んだ形の嘴の後に目と羽冠があり、その下には肢が附くが、身体は小ぶりの「し」字形をもって表わされている。星座と比べてみると、これは柳に当る所だけに対応し、星、張、翼は省かれていると理解されよう。柳だけをもって鴉を表現した図像である。先に「尔雅」に「昧はこれを柳といい、柳は鴉火なり」とあったことが想起される。柳の星座だけについて鴉火だ、と言っていたのは、別に柳一つだけを挙げて朱鳥の星座群全体を代表させた、というような言いまわしの問題ではなく、こういう鴉火の図像があつての話だった、と考えればわかり易い。

柳について『史記』天官書には木や草を司る、とある。今日の曆で言つて四月から五月、草や木の葉が急に青々と茂り始める時期の星座であるから、このような伝えのあつたことは首肯できる。しかし殷時代に人を殺傷するための武器である戈に飾られているこのイヌワシの星座の神は、草木を司るものというのではぞぐわない。この場合前引の『詩』の毛伝に「貪欲で凶悪な鳥」とされ

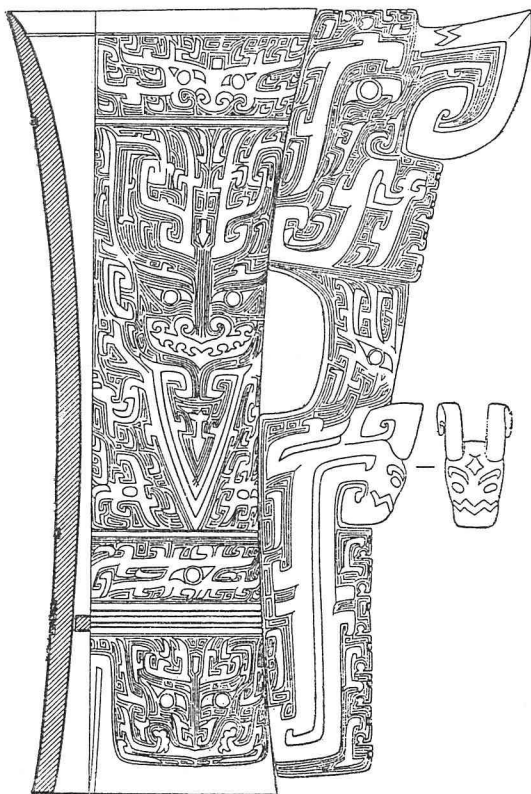


図8 柳を象る鳥 象牙杯 殷後期

この星座の神はまた図8のように酒杯の飾りとしても使われている。把手の指を挿し込む部分から上に、巻いた嘴を外に向け、図7と同様大きな頭をもち、目の後方に冠羽を垂れ、目の下に「し」字形の身体と足のついた柳・鶉火の星座の神である。武器の飾りとしては右のように解されるとして、酒杯の飾りとしてはどうか。『史記』の南宮の条の始めの所の『正義』には柳の星座は天のコック長で、宮中の御馳走を司る官を管轄し、味を調える、と記されていた。朱鳥の身体を構成する星座の一つである張について、『史記』に

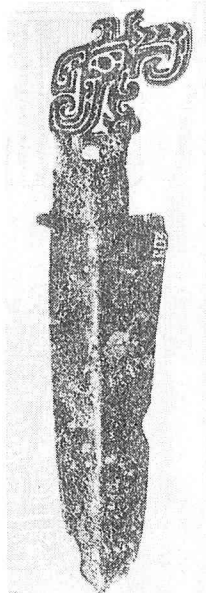


図7 柳を象る鳥 戈 殷後期

るワシの星座の神は、ワシの本性を色濃く残した神であったと考えた方が似つかわしいのではなからうか。イヌワシは大型の鳥（ガンやハクチョウほか）や獣（シカ、ヤギ、キツネ、ヒツジ）を捕えて食う²⁴。殷後期の早い時期、殷王朝は盛んに敵対する国や周辺の異民族を襲撃して首をとり、財物を奪い、捕虜を獲得して帰り、祭祀の犠牲に使用した。イヌワシの星座の神の像は、その武器の守り神として極めて似つかわしいものと言えよう。

はここは台所で客に酒をすすめることを司る、と言い、唐時代の注釈にもこれは鳥のえぶくろの意味の星座で、天の廚房であって食物と飲物を司り、賓客に対して褒美に賜る酒をすすめることを司る、と記される。鳥のえぶくろは、食ったものをどんどんつめ込んで貯めておき、順次胃に送り込む器官である。これが象徴的に解されて天の神の食事関係の役所とされているのである。前引の『史記正義』に柳の星座の働きとして記される所は、この朱鳥のえぶくろの星座、張の働きが朱鳥の最初の星座、柳のものに敷衍されていると考えられる。

さてこの柳の働きは酒杯の飾りとしてはびったりである。この杯を背にしたワシの星座の図像は、天のコック長で、杯を背に負い、天の世界から地上の酒宴の場に降り立った、という趣向である。この杯の酒はただの酒でなく、この天のコック長が味を調えた天上の酒に見たてられたことであろう。

図8の杯は象牙製であるが、このような材質のものが残っていることは例外的である。殷に限らず、春秋、戦国時代でも酒杯は角とか木など、腐って失われ易い材料で作られたため、遺物は稀である。図8のような装飾のついた杯の伝統は、それでも戦国時代までたどることができるのであるが、ここには引用する余裕がない。

酒杯の遺物は少いが、酒を容れておくつば類や飯を盛るおはちの類は青銅が使われたため、その遺物も少くない。その中にイヌワシの星座の鳥形を使ったデザインが見出される。図9は酒と香草の煮汁を混ぜたものを入れるための水指形の容器（匱）の把手に使われたもの。同じ形の把手は飯のおはち（篋）にも多く見られる。図10、11は把手としてでなく、同じ鳥を容器の形に仕立てたもの。図10は単独で、図11は一對を背中合せにした形で容器に作られている。ここに引いた類は、鳥の頭の上に所謂饜饜、ないしそれと似た形を持ち、格の一段下る神の顔（轡首）が載っている所に特色がある。図9で把手の鳥の特徴的な鉤形の嘴と円い目から左が、鳥の頭にかぶさった別の神の顔になっている。図10右図、11左半では嘴から右に別の神の顔が載り、鳥の目もかくれている。このデザインについて筆者は以前にこの鳥は鳳凰で、天上の最高神である帝（所謂饜饜）やその一段格の下る神（所謂轡首）の仮面を着用して出現した姿であると解釈した。現在もこの解釈は誤っていないと考える。ただ、鳳凰といっても殷時代以来何種類かが知られているが、その時それがどのような性格を持った鳳凰であるか特定しなかった。右に考察した所を頭に置いて改めて考えてみれば、飲食と関係の深い青銅器に使われた鳳凰の類は、

天の台所を司り、客を御馳走する張の星宿を腹とする朱鳥、鶉火

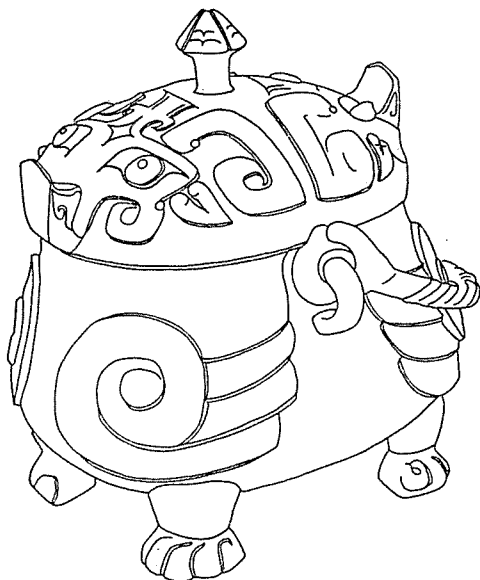


図11 鸞鬘の仮面を着けた朱鳥 卣 殷後期

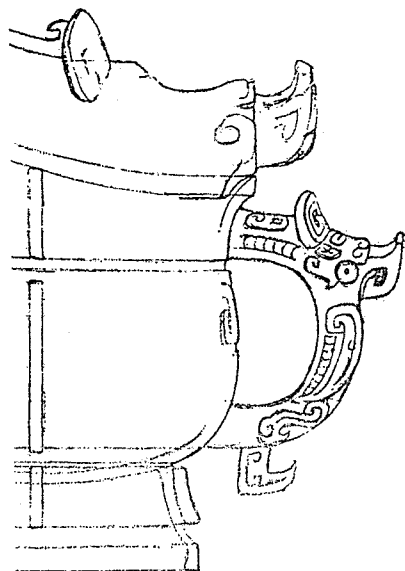


図9 鸞首の面を着けた朱鳥 匜 殷後期

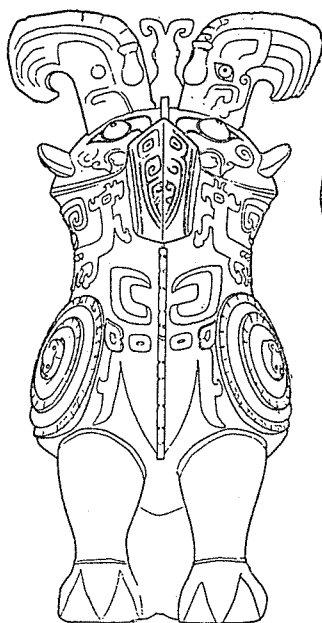
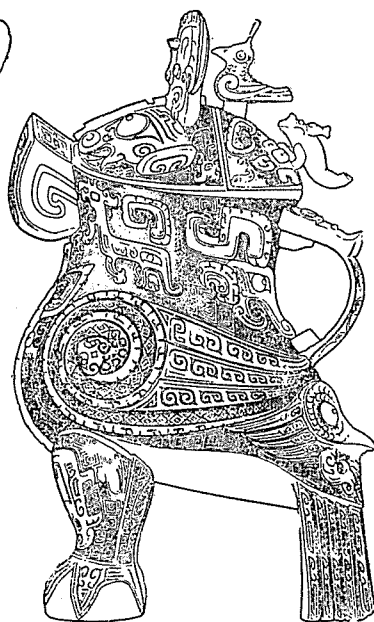


図10 鸞首の仮面を着けた朱鳥 容器 殷後期



の鳳でなければなるまい。殷周時代の青銅製の容器類は、言うまでもなく死んだ祖先の祭祀用の器である。祖先の神はこの容器をもって飲食の饗応を受けるのである。祖先の神はこの容器のために飲食を用意し、地上の祭祀の場で供されるのであるが、出される飲食物は天の最高神の仮面を着けた朱鳥の星座の神が、その使者の資格で天の厨房からかつて来たという形の容器をもって供され、そういうたてまえのものとして祖先に受け取られたと考えられる。^⑩ この祭器からお下りを飲んだり食ったりする生者は、天の帝と自分の祖先のお相伴をしたことになる。^⑪

殷周の祭祀用の器に飲食を背に負い、或いは腹に容れて運ぶ形で使われる鳥が朱鳥の星宿を象つたものとなると、図9～11のような形でその頭上に仮面の形で着けられるその主人の饗饗^⑫帝も、どの帝であるか見当をつけ得ることになる。殷時代の青銅器に飾られる所謂饗饗について、筆者はこれを当時の最高神の「帝」の図像と考えるのであるが、その種類は大きく分けても十に余る。しかし神としてそれらがどのような性格によって特徴づけられていたかについて知る手掛りは、今の所殆んどない。今の朱鳥が仮面としてかぶり、その主君であることに間違いない饗饗は、総ての例で、図10、11に見るような、筆者が羊角と呼んだ、牡羊の角のように巻いた角をもつ。^⑬ この事実をどう解釈すべきか、以前

には良い考えが浮ばなかったので、事実を指摘するに留ったが、この鳥が朱鳥の宿を象つた神と知れば、何でもないことである。

『史記』の南宮の星座群中、前引の朱鳥を構成する柳、星、張、翼の北方に、天子の宮廷になぞらえた將、相等の官名を持つ星に囲まれ、太微と呼ばれる一群の星があり、中に五帝座の星座がある（図1）。獅子座から乙女座にかけての辺である。『史記』には書いてないが『晋書』天文志に五帝座の五つの星の真中のものを黃帝の座と呼び、蒼帝、赤帝、白帝、黒帝がその東、南、西、北からこれを囲んでいるとしている。朱鳥の主人である帝は同じ南宮の中に索むべきと思われるとはいへ、五帝座の中心を黃帝が占めるといっても、差し当りそれがどの帝であるかは決められないわけである。とはいへ、この太微の西方に軒轅の星座があり、軒轅は『晋書』天文志、上に黃帝の神とされている所から考え、その東方の五帝座の中央の主人格の星を黃帝の座とすることは筋が通っていると言えよう。そう考えてよいとすると、方角で言うると南方に当てられた南宮の中に、五行説で言う中央に当る「黃」の字を附した帝の座があったことになる。

これは少し妙であるが、次のように考えられる。『史記』の天官書の天官とは、『素隠』に

案、天文有五官。官者、星官也。星座有尊卑、若人之官曹列

位、故曰天官（案ずるに、天文に五つの官がある。官とは星の官（役人）である。星座には身分の尊卑があること、人間の官にいろいろな部署や地位があるようなものである。故に天の官という）

とあるように、星座は中央と東南北西の五方向にある役所のグループと看做されていたわけである。繁雑であるから引かないが、それぞれのグループには帝の家族や官僚組織、附属建物の星座が附随している。役所だけでなく、夫々には最高支配者も考えられている。今引いた南宮のほか、東宮には天王（帝）の座だという大角（アークトゥルス）があり、サソリ座のアンターレスは天王（帝）だという。西宮には帝の座はないが五車（御者座）という五帝の車庫がある。北宮には帝の關係の星座はなく、それに代るものか、中宮には北極（コグマ座）の中に太一の常居があり、『晋書』天文志には華蓋星の下に五帝座があり、後漢の鏡背紋にその画像がある。^②もう少しすっきり整理したらよいと思うが、列国抗争の戦国時代にはこれで当り前と思われていたに相違ない。南宮に黄帝の座があつて、その家来に朱鳥がいる、などというのも、古い伝承が整理されずに残存したとすれば、それだけに真実味があると言えよう。黄帝の名で呼ばれていたかどうかは知る術もないが、朱鳥の主人の帝が太微中の五帝座の中心的な星に座を持つ

帝であつたことは想定して差支えないであらう。

飲食の具を飾る朱鳥については記すべきことが未だ多く残っているが、紙面の制限があるので、別の機会に譲るほかない。先に火の鳥としてのイヌワンが早く河姆渡文化の日月の円盤の両側に出現することに注意したが、あとそれと殷との中間に位する龍山文化にその画像が現れることだけは指摘しておかねばならない。

図12-14のごときものである。このような龍山文化の資料や河姆渡文化、良渚文化の鳥關係の画像や記号等を論じた論文は従来少くないが、いまこの狭い紙面で一々紹介する余裕はない。一通り画像資料を引き、文献資料中のこの地方に係る鳥關係の伝説に言及し、鳥の祖先神、トーテム、太陽神等といった方向に解釈を行う、というのが通例で、引かれる資料も同じなら立言も似たりよつたりである。^③

ここでは龍山文化の鳥の画像を少し丁寧に見てみよう。図12は台北の国立故宮博物館蔵の軟玉の斧に彫られたもので、表現に使われた線の様式、技法から年代が知られる。鳥頭は側視形に表わされ、大きな鉤形の嘴が最上部にあり、人間の目のような形の目の右下に長い「し」字形の冠羽が垂れている。この画像に見る程に先端が強く内に巻き込んだ嘴はワシやタカに見られず、朱鳥の宿の柳の星座の形を原形とするものであり、また現実の猛禽にな

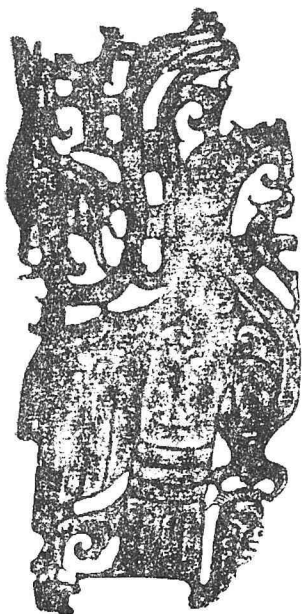


図13 朱鳥 軟玉板 龍山文化

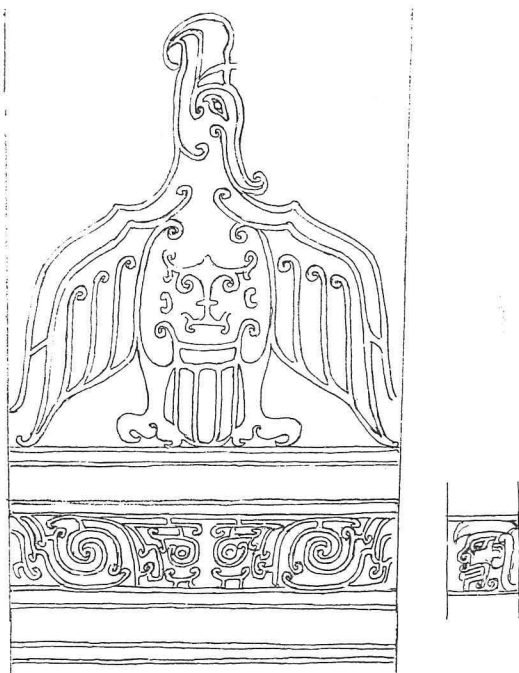


図12 朱鳥 軟玉斧 龍山文化

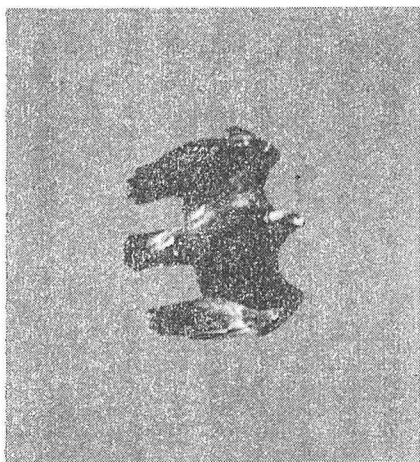


図15 急降下するイヌワシ（宮崎学氏提供）

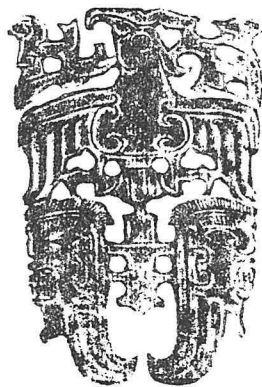


図14 朱鳥 軟玉板 龍山文化

長い冠羽の表現はイヌワシの金色の冠羽の象徴的表現で、全体が神化された朱鳥の図像であろうこと、先に記したことがそのまま通用するであろう。^⑧

翼は空中を遊弋する時のように一ぱいに拡げられては、また物に棲っている時のようにたたまれてもいない。翼の上縁、肩から少し外れた所に突出部があるのは、図15に著るしく角張って見えている、尺骨、橈骨の先の関節、人間の手頸に該当する部分である。この尖りは図15の写真に誇張された形に写っている。図12と14で翼の外側に一段短い羽根が重なったような形に表現されているのは、先の間の手頸に該当する関節部の外側にある小翼羽である。そこに第二指骨の入った突出があり、そこに短い風切羽根が付き、翼の浮力を調節する。図15に急降下する時の小翼羽の形が写っている。図12と14の図像の半分たたまれたような翼は、獲物に襲いかかる時の翼の一瞬の形を図式的に表現したものと見られよう。

どの図像も肢をのばし、指は開かれている。図12では爪の先端だけが下の線に接し、指は浮いている。物の上に棲っているのであれば指は下の物に接していなければならない。また空中を飛翔している時は図15のように指をちぢめている。とするとこのような図像は空中から獲物に掴みかかろうとして指を開いた瞬間を写

したもので、肢は下方の獲物に向って伸されているはずであるが、描き易いように身体と同方向に表現されたもの、ということになる。

図14は故宮博物院で「鷹が人の首を攫う」と題されているが、肢の下の一对の人間には爪の先が軽く触れているだけである。図13のように爪の下に人間の首があるのを、巫鴻がこの鳥が人の首を攫う光景と見、この鳥形の神に人間の犠牲を捧げて祭祀していると解したのに対し、鄧淑蘋は図12のように同様な髪を長く垂した人頭が分離して表現されている例のある所から、その解釈は正しくないとする。^⑨その点は確かにその通りで、人間の首を攫うのであれば、しっかり爪で掴んだ状態を描写したらよい。図14などは人間の頭が二つあるのである。一度に二個攫えるであろうか。現実の猛禽は獲物を両方の肢でしっかり掴んで飛び去る。昔の人はよく観察していたはずである。鄧氏はこの猛禽の神を猛禽類という意味を持った語、鶻カササギに読みかえうる掣カササギを名として持った、少昊の姿と見た。^⑩しかし類を指す語は神の名にふさわしくないであろう。この龍山文化の猛禽の姿の神は、筆者がこの論文で朱鳥の宿を象ったと考えた殷代の鶻カササギ、イヌワシの姿の神の古い図像と見るべきであろう。しかしそれがこの時代、どのような格の神で、その役割はどのようなものであったかは、今後の問題である。こ

の鳥形の神と一緒に表わされる人間の頭の形を持つ神には各種があるが、それらとの関係如何^⑮、図13、14で翼の上に乗る小型の鳥その他の動物の意味如何等、資料が増加してくるのを待てば、憶測を排し、多少とも証拠を示して論ずることも可能となるであろう。

この論文には本来殷く漢の酒杯の類に加えられた鳥を象る装飾を論じた部分があり、以上はその序論のようなつもりであったが、既にその部分を収容すべき頁数が不足する見通しとなった。その分は切り離し、ここでこの小論を終っておく。

- ① 錢大昕は（『二十二史考異』三、史記の冬、これら中宮、南宮等の宮は官の誤りだと指摘し、従うべきだとされる（潛水一九四四、一三八頁）。ここには現行のテキストの「宮」字を使っておく。
- ② 林一九九三、二四〇～二八頁。
- ③ 同じことが『晉書』天文志に書かれ「又主雷雨」の語が入っている。
- ④ 橋本一九九三、六三頁、図15。
- ⑤ 藪内一九六九、四六頁。
- ⑥ 同右、四六～四七頁。
- ⑦ 王健民等一九七九、『特別展曾侯乙墓』（展覧会カタログ）一九九二、東京、一五。
- ⑧ 橋本一九九三、六九頁。
- ⑨ 次に引く杜預の注および孔穎達疏に從って訳した。竹内一九五八、一七九頁、貝塚一九七〇、二〇三頁には別様に解されているが、如何であろうか。
- ⑩ 出火、内火については『周礼』夏官中の火を司る官である司燧の条

及び鄭玄の注を参照。

- ⑪ 音は徒丸反でタンと読まれている。なお『説文』の引用中の鷩は現行の『詩』に鷩とあるのが正しく、鷩は写し進えとされる（馬瑞辰『毛詩傳箋通釈』卷二十一）。

- ⑫ 王筠の『説文句説』鷩字の条に鷩首、鷩火、鷩尾の鷩は鳳の別名で鷩、鷩と係りはないと記されるが、独断の言である。

- ⑬ 『学生版動物図鑑』七四頁。小林一九六七、図版二五。

- ⑭ 『中国大百科全書』生物学Ⅰ、二五六頁。

- ⑮ 『中国大百科全書』生物学Ⅲ、彩色図版一六四。

- ⑯ 他にカンムリワシという小型のワシがいて後頭の羽毛が少し長く冠状になるが（高野一九九二、一七二頁）、分布が現在華中以南に限られる。

- ⑰ 林一九九一a、一一七頁。

- ⑱ 他に林一九八六、二一七八～二八〇、二一四八～一四八六（二一四八～一四八五以外は略）。

- ⑲ 林一九九一、三〇七～三二頁、林一九九一a、一一五頁。

- ⑳ 鄭一九六三、一二四頁。

- ㉑ 林一九八六、三四～四〇頁。

- ㉒ 林一九八六、一三二～一四八頁。

- ㉓ 朱鳥の宿、朱鳥は朱雀とも呼ばれ、漢時代にこの「雀」は鳳凰の一種と看做されている（林一九八六、一三八～一三九頁）。

- ㉔ 青銅の祭器をもって祀られる身分の人々の祖先は西周時代、死後天上の帝の左右にいるものと考えられていた（白川一九六二～一九八四、一八、二六九～二七〇頁）。

- ㉕ 鉄鐘の銘文に「これ皇いなる上帝と百神（多くの祖先の靈）は自分をたすけ、自分の猷も成功して比類がない。自分は祖先について皇いなる天に配（仲間入り）させてもらい……」とある。皇いなる天に

配せられる」の語は他に南宮乎鐘（中国社会科学院考古研究所一九八四く、一、一八一）、鉄盤（同、八、四三七一）にも見えるが、現実の行動としてはここに引いたような青銅器で天上の帝、死んだ祖先の霊と飲食を共にすることと解されないであろうか。

なお後漢時代の地下の墓室の装飾に死去した夫婦が神話的世界の中に坐し、周囲に音楽、踊りや車馬の並ぶ図像があり、横に「この上の人馬は皆天倉に上食せん」と書かれるものがあるが（山東省博物館等一九八二、五一頁）、ここに早く死者は天上の食物を供される、という觀念の存在が察知される。

26 林一九八六、一七六六七頁。林一九九三a。

27 林一九八六、三六頁および注105。

28 図11の角は基部に頭が附いて龍の形の形をとる。

29 林一九八九、三〇〇三二頁。

30 黄帝は皇帝、おおいなる帝で、古くは五行の黄と關係がなかったということもありうる（楊一九三八、一九六頁）。

31 例えば牟一九八四、石一九八九、張一九九〇、杜一九九二、劉一九九二、鄧一九九三。

32 図13、14で嘴の基部にこれを横切る形の線があるのは、ワシ、タカの類で嘴の基部をおおう皮膜、蟬膜と呼ばれるものがあるが、その線に対応する表現らしい（我孫子市鳥島の博物館、齋藤安行氏の教示を受けた）。

33 鄧一九八六、三八頁。

34 同右。

35 杜一九九四、六三頁。

図出所目録

図1 『考古』一九七五、三

図2 京都博物館一九六九、第5図

図3 橋本一九九三、図11

図4 林一九九一a、図25

図5 梅原一九三三、図版一五

図6 商一九三五、貯二四

図7 中国社会科学院考古研究所一九八〇、図版七二、4

図8 同右、図一〇八

図9 京都大学人文科学研究所資料

図10 中国社会科学院考古研究所一九八〇、図三六

図11 林一九八六、図19

図12 林一九九一、図5-7

図13 『上海博物館展』37

図14 故宮博物院展示

図15 宮崎学氏写真

引用文献目録

梅原末治一九三三『杉槩の考古学的考察』京都。

王健民、梁柱、王勝利一九七九『曾侯乙墓出土の二十八宿青龍白虎図象』

『文物』一九七九、七、四〇-四五頁。

貝塚茂樹一九七〇『春秋左氏伝』（『世界古典文学全集』）東京、筑摩書房。

『学生版動物図鑑』東京、北隆館。

清水嘉一 一九四四『史記天官書恒星考』『東方学報』一四、三分、一三六-一五六頁。

京都国立博物館一九六九『守屋孝威蒐集方格規矩四神鏡図録』京都。

小林桂助一九六七『標準原色図鑑全集、鳥』東京、保育社。

山東省博物館、山東省文物考古研究所一九八二『山東漢画像石選集』濟

南。

白川静一九六二〜一九八四『金文通釈』、『白鶴美術館誌』一〜五六。

『上海博物館展』(展覽会カタログ) 東京、一九九三。

商承祚一九三五『十二家吉金圖録』北平。

石興邦一九八九『我國東方沿海和東南地区古代文化中鳥類圖像与鳥祖崇拜的有關問題』、『中国原始文化論集——紀念尹達八十誕辰——』二三

四〜二六六頁。

高野伸二一九九二『フィールドガイド日本の野鳥』東京。

竹内照夫訳一九五八『春秋左氏伝』(『中国古典文学全集』) 東京、平凡社

中国社会科学院考古研究所一九八〇『殷墟婦好墓』北京。

中国社会科学院考古研究所一九八四『殷周金文集成』北京。

『中国大百科全书』生物学Ⅰ—Ⅲ、北京、一九九一。

張明華一九九〇『良渚玉符試探』、『文物』一九九〇、一二、三三〜三六、九二頁。

鄭作新一九六三『中国经济動物誌』鳥類、北京。

杜金鵬一九九二『関于大汶口文化与良渚文化的幾個問題』、『考古』一九九

二、一〇、九一五〜九二二頁。

杜金鵬一九九四『論臨朐朱封龍山文化玉冠飾及相關問題』、『考古』一九九

四、一、五五〜六五頁。

鄧淑蘋一九八六『古代玉器上奇異紋飾的研究』、『故宮學術季刊』四、一、

一〜五八。

鄧淑蘋一九九三『鴻杖——兼談古越俗中的鳥崇拜——』、『故宮文物月刊』

一一八、九九〜一二三頁。

『特別展曾侯乙墓』(展覽会カタログ) 一九九二、東京。

林巳奈夫一九八六『殷周青銅器紋樣の研究——殷周青銅器綜覽二——』

東京。

林巳奈夫一九八九『漢代の神神』京都。

林巳奈夫一九九一『中国古玉の研究』東京。

林巳奈夫一九九一a『中国古代における日の暈と神話的圖像』、『史林』

七四、四、九六〜一二一頁。

林巳奈夫一九九三『龍の話』(『中公新書』) 東京。

林巳奈夫一九九三a『饕餮・帝說補論』、『史林』七六一五、七八〜一一

八頁。

橋本敬造一九九三『中国占星術の世界』(『東方選書』) 東京。

李永抗『紹興三〇六号越墓物議』、『文物』一九八四、一、三〇〜三五頁。

藏内清一九六九『中国の天文曆法』東京。

楊寬一九三八『中国上古史導論』、『古史辨』七、六五〜三六七頁。

劉敦愿一九九二『試論中国古代的鷹崇拜』、『故宮文物月刊』一一五、一

一〇〜一二九頁。

(京都大学名誉教授)